

平成28年度埼玉県学力学習状況調査報告書

〔平成28年4月実施〕

～子供たち一人一人のよさを伸ばし、よさを活かす～

平成 28 年 11 月
埼玉県教育委員会



はじめに

本調査は、「学習したことがしっかりと身に付いているのか」という今までの調査の視点に、「一人一人の学力がどれだけ伸びているのか」という新たな視点を加えた全国で初めての調査です。小学校4年生から中学校3年生まで、児童生徒一人一人の学力を継続して把握することで、子供たちが現在の実力を知り、「どれだけ自分が伸びたか」を実感し、自信を深めていくことを大切にしたいと考えています。

昨年4月に第1回目を実施し、本年4月に第2回目となる調査を実施したことで、初めて、「学力の伸び」を把握することができました。その調査結果を、7月に市町村教育委員会及び各学校へ送付しました。市町村教育委員会及び各学校におかれましては、児童生徒一人一人の学力の状況に応じたきめ細かな指導や、調査結果を独自に分析し、その分析を踏まえた仮説を立て、改善策が展開されていることと存じます。

本報告書では、調査結果の概要として、県全体の学力や「学力の伸び」の状況などを掲載するとともに、子供たちの学力をさらに伸ばし、指導上の課題を解決するための「指導改善のポイント」を示しております。併せて、「質問紙調査の分析」や、調査結果を活用する学校の様子なども記載しております。

これらのデータや記載内容は、調査の対象学年や該当教科はもちろんのこと、全ての学年や教科の指導に活用したり、研修の資料や講話等の話題にしたりするなど多面的に活用できるものです。

さらに、紙幅の都合上、紹介できなかった指導事例や詳細なデータは、県教育委員会ホームページに示しておりますので、こちらについても、ぜひお役立てください。

市町村教育委員会及び各学校におかれましては、この調査から導き出された有効な指導方法などを共有財産とし、一人一人の児童生徒の学力を伸ばすための指導改善に努めていただきますようお願いいたします。

平成28年11月

埼玉県教育委員会教育長 関根 郁夫

目 次

はじめに

平成28年度 埼玉県学力・学習状況調査グランドデザイン

第1章 調査の概要

1 調査の概要	8
2 学力の経年変化（伸び）を見る調査の設計	10
3 個人結果票について	14
4 調査に関するQ&A	16

第2章 教科に関する調査結果の概要

1 「学力の伸び」の状況	24
2 小学校4年生から中学校3年生までの各教科の学力レベルの分布	25

第3章 学習指導のポイント

国 語	31
算 数	57
数 学	71
英 語	85

第4章 質問紙調査の分析

1 「教員との関係」と「自分に対する考え」との相関	96
2 「学級の雰囲気」と「学習の様子」に関する相関	98
3 「学習意欲」と「教科に関する調査」に関する相関	100
4 「家庭での生活習慣」に関する相関	102
5 「家庭での様子」と「自己肯定感」に関する相関	104

第5章 がんばる学校の紹介

1 草加市立新田小学校の取組	108
2 和光市立第二中学校の取組	109
3 日高市立高萩北小学校の取組	110
4 鶴ヶ島市立南中学校の取組	111
5 三芳町立三芳東中学校の取組	112
6 上里町立上里東小学校の取組	113
7 皆野町立皆野中学校の取組	114
8 行田市立中央小学校の取組	115
9 羽生市立岩瀬小学校の取組	116
10 八潮市立潮止中学校の取組	117



平成28年度 埼玉県学力・学習状況調査

背景 1
学力向上の必要性

調査の目的
本県の児童生徒の学力や学習に関する調査結果の工夫改善を図り児童生徒一人一人の学力向上を図る

指導改善の方向
Ⅰ 学力の伸びの状況
→ P24～27
Ⅱ 指導改善の方策
→ P31～93

学力調査の結果概要
6学年を通じた各教科におけるよさや課題

調査の実施
調査日…平成28年4月14日
調査対象…小学校第4学年～
中学校第1学年、
中学校第2・3学年
市町村教育委員会

**各学校における校内研修
学力向上の取組**

学力
知識・技能
思考力・判断力
表現力

調査結果の活用
県教育委員会 各市町村教育委員会

復習シートの活用
○定着を図り、より伸ばすために
○繰り返し学習による課題の克服
県ホームページへ

**調査結果を活用し「さらに」
V 学校での取組例**



一人一人が自分の成長を実感する!

**全国学力・学習状況調査の成果
(学習内容の定着)**

**一人一人の学力向上
に伸ばす教育**

個人結果票

児童生徒一人一人に対して

- ・教科に関する調査の結果
- ・質問紙調査の結果
- ・学習に関するアドバイス

学習状況調査グランドデザイン



目的

事項等を把握することで、教育施策や指導力を確実に伸ばす教育を推進する。

背景 2
これまでの調査の課題

実施

日(木)
・中学校第3学年
・第6学年:国語、算数、質問紙
国語、数学、質問紙
F:国語、数学、英語、質問紙
会、各小・中学校:質問紙

質問紙調査の結果概要
6年間を通して見えてきた子供たちの意欲や態度の変容

活用の方向
Ⅲ 質問紙調査の分析
→ P96~105
Ⅳ 分析支援プログラム等の活用

全ての学年・教科へ

新たに見えてくる児童生徒の姿
学習意欲と生活習慣の関係
学習態度と学力の関係など

詳細な分析

市町村、各小・中学校

主体的に学習に取り組む意欲・態度

各家庭へ
学級懇談会、学校便り など

「伸ばす」「課題を克服」
→ P108~117

学力を確実に教育の推進

- 一人一人に目を向けたアドバンスド事業
- 埼玉県学力・学習状況調査のデータ活用事業

学校が変わります!
ークラス・学年・学校を超えたネットワークー

学校全体の情報共有

調査データの詳細な分析

地域・保護者との積極的な連携

共助

自校のよさを自覚し
よりよい学校文化を
創り上げていく!

小・中学校の積極的な連携

成長の記録 (新座市立新堀小学校・毛呂山町立光山小学校)

新堀小学校 4年生 算数カード

学年・教科	名前	得意	苦手
算数	田中 太郎	分数の計算	小数の計算
国語	田中 太郎	漢字の書き取り	読解
英語	田中 太郎	単語の暗記	文法
音楽	田中 太郎	楽器の演奏	楽理
体育	田中 太郎	運動	持久力
美術	田中 太郎	絵画	彫刻
家庭科	田中 太郎	調理	洗濯
総合	田中 太郎	社会	自然
外国語	田中 太郎	英語	フランス語
道徳	田中 太郎	正義	礼儀
特別活動	田中 太郎	委員会	部活動
その他	田中 太郎	読書	旅行

新堀小学校 4年生 算数カード(記入例)

光山 太郎 5年1組 入学年度 平成23年度

学年	1学期	2学期	3学期	4学期	5学期	6学期
国語	85%	88%	90%	92%	95%	98%
算数	78%	82%	85%	88%	90%	92%
英語	80%	83%	86%	89%	91%	93%
音楽	82%	85%	88%	90%	92%	95%
体育	84%	87%	90%	92%	95%	98%
美術	86%	89%	92%	95%	98%	100%
家庭科	88%	91%	94%	97%	100%	100%
総合	90%	93%	96%	99%	100%	100%
外国語	82%	85%	88%	91%	94%	97%
道徳	84%	87%	90%	93%	96%	99%
特別活動	86%	89%	92%	95%	98%	100%
その他	88%	91%	94%	97%	100%	100%

第1章

調査の概要

本調査のねらいや調査の設計、県としての「学力」や「学力の伸び」の考え方についてのイメージを示しました。

また、学校へ送付した個人結果票のイメージや活用方法、調査に関するQ&Aも掲載しています。

1 調査の概要

(1) 調査の目的

本県の児童生徒の学力や学習に関する事項等を把握することで、教育施策や指導の工夫改善を図り、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

(2) 調査対象

県内の全公立小・中学校（さいたま市を除く。）

- ・小学校 708校（149, 227人）
- ・中学校 356校（146, 323人）

対象学年	教科	調査実施日
小学校第4学年	国語 算数	平成28年4月14日（木）
小学校第5学年	国語 算数	
小学校第6学年	国語 算数	
中学校第1学年	国語 数学	
中学校第2学年	国語 数学 英語	
中学校第3学年	国語 数学 英語	

(3) 調査内容

各教科について、下記の調査範囲に基づいて作成したペーパーテストにより実施する。
また、学習に対する意識や生活の様子に関する質問紙調査を併せて実施する。

① 教科に関する調査

ア 対象学年

小学校第4学年～中学校第3学年

イ 対象教科及び出題範囲

小学校第4学年～小学校第6学年 … 2教科（国語、算数）

中学校第1学年 … 2教科（国語、数学）

中学校第2、3学年 … 3教科（国語、数学、英語）

「小（中）学校学習指導要領（平成20年告示）」に示された内容で、各学年とも前学年までの学習内容（前学年の学習内容を中心とする。）を範囲とする。

ウ 調査事項

基礎的・基本的な知識・技能をみる問題（知識に関する問題）及び基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等をみる問題（活用に関する問題）

② 児童生徒に対する質問紙調査

ア 対象学年

小学校第4学年～中学校第3学年

イ 調査事項

学習に対する意欲や意識、学習方法、学習環境、生活の諸側面に関する事項

③ 学校及び市町村教育委員会に対する質問紙調査

ア 対象

埼玉県内の公立小・中学校

埼玉県内の市町村教育委員会

イ 調査事項

学校や市町村教育委員会における指導に関する取組や学校における人的・物的な教育条件の整備の状況に関する事項

(4) 調査に要する時間

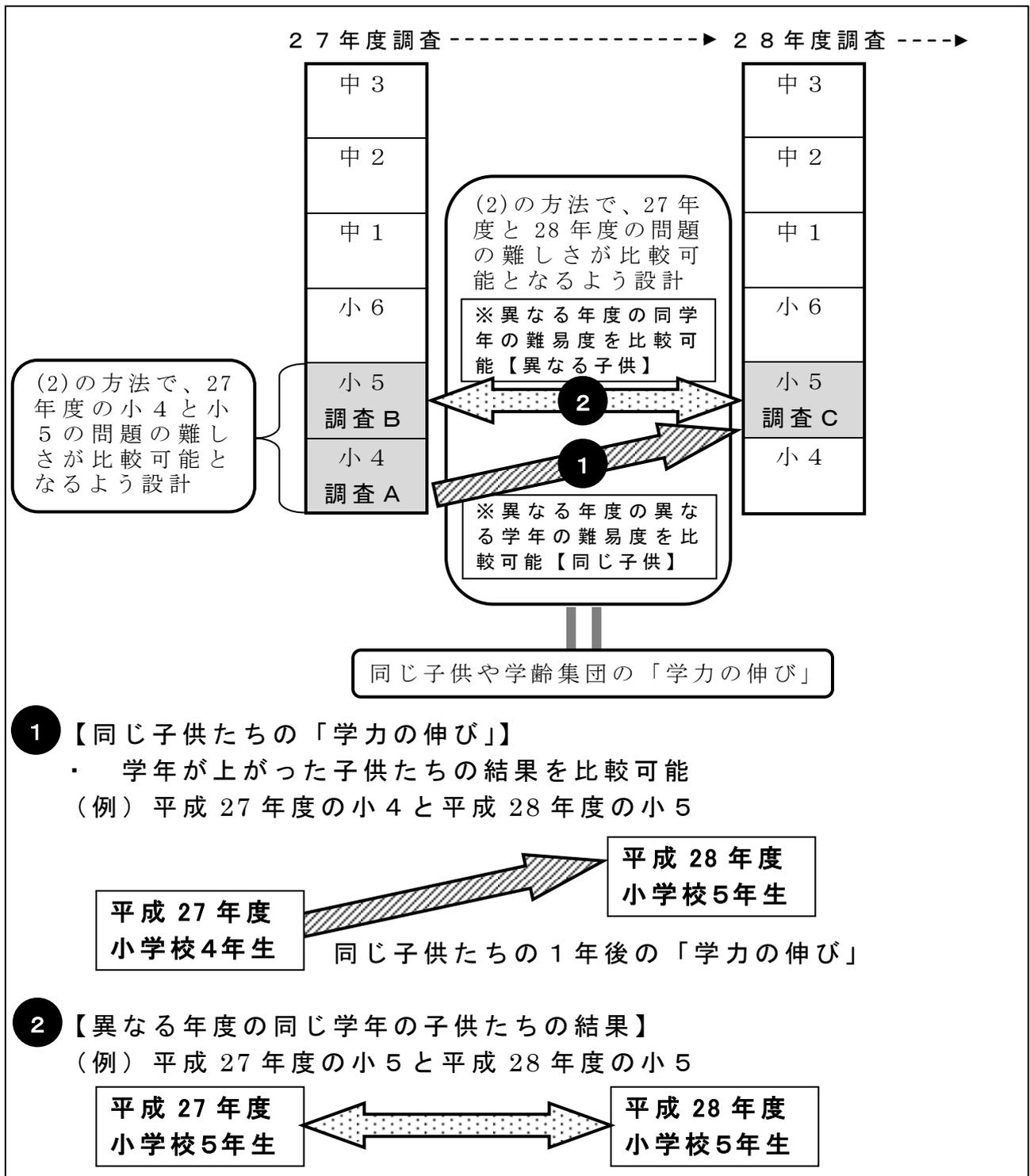
小学校第4学年～小学校第6学年 … 教科に関する調査の調査時間は1教科40分間とする。質問紙調査の調査時間は30分程度とする。

中学校第1学年～中学校第3学年 … 教科に関する調査の調査時間は1教科45分間とする。質問紙調査の調査時間は30分程度とする。

(3) 埼玉県学力・学習状況調査の設計

(1)、(2)にもとづき、本調査では、以下のような調査設計により問題の難しさを比較可能にして、それに応じて学力の経年変化(伸び)を見ることとしている。

調査の設計【イメージ】



(4) 本調査における「学力の伸び」の捉え方

児童生徒は、学年が上がることで新たな知識などを身に付け、確実に「成長」している。本調査では、その「成長」の中でも、とりわけ、以前と比較してより難易度の高い問題に正答できる力を身に付けることを「学力の伸び」と捉える。

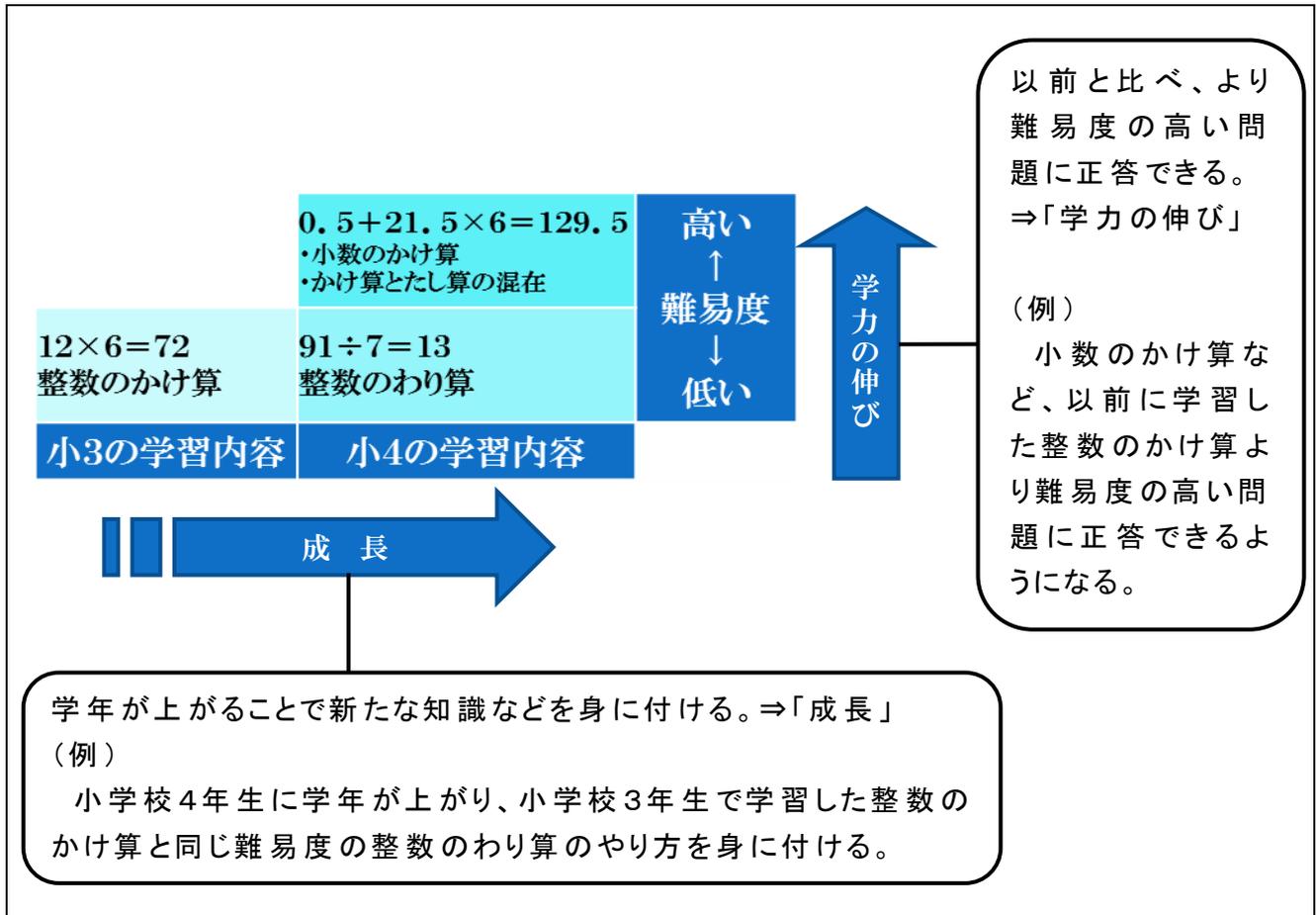
例えば、ある児童が、小学校3年生の学習内容で、 $12 \times 6 = 72$ という「整数のかけ算」の問題を正答し、次年度の調査で、 $91 \div 7 = 13$ という「整数のわり算」の問題を正答できたとする。

この児童は、学年が上がり、学習指導要領に基づき「わり算」のやり方を学んだことにより、 $12 \times 6 = 72$ と同じくらいの難易度の「わり算」の問題に正答できるように「成長」したということになる。

一方で、同じ児童が小学校4年生の学習内容で $0.5 + 21.5 \times 6 = 129.5$ の「小数のかけ算とたし算が混ざった」、整数だけのかけ算・わり算より難易度の高い問題を正答できたとする。

この場合、昨年度と比較して、より難易度の高い問題に正答できるようになったので、本調査における「学力の伸び」と捉える。

「学力の伸び」の捉え方【イメージ】



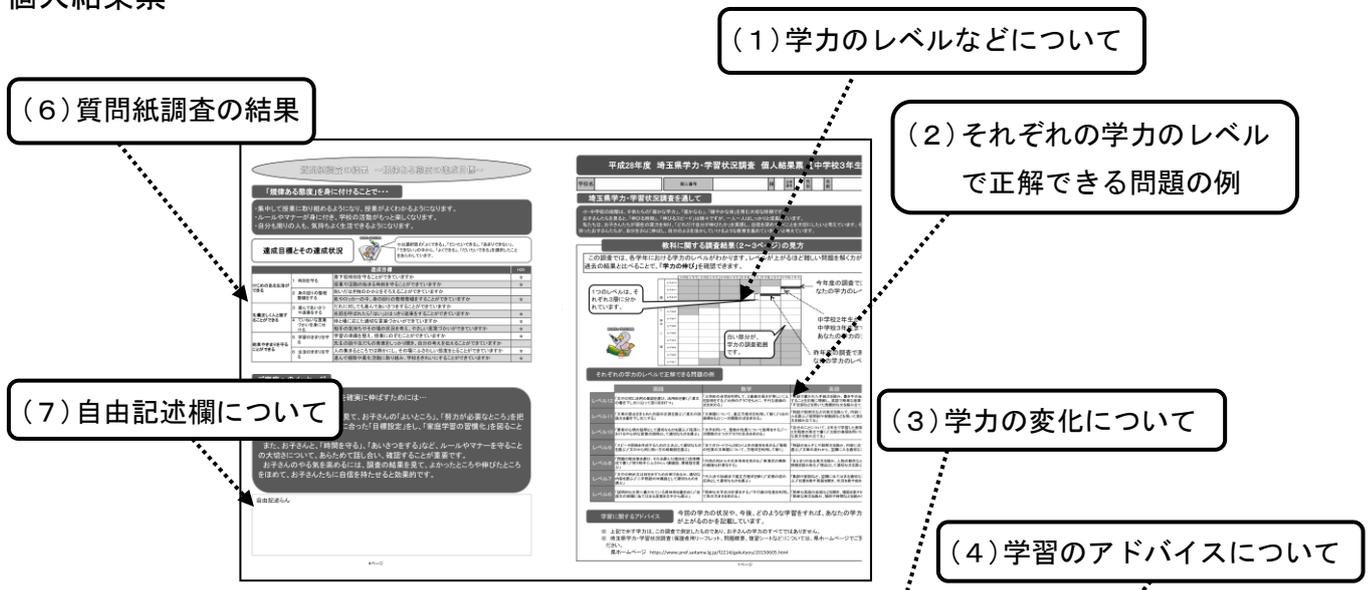
3 個人結果票について

県教育委員会では、県内公立小・中学校の小学校4年生から中学校3年生までの児童生徒一人一人の学力の経年変化（伸び）を把握することで、子供たちが現在の実力を知り、「どれだけ自分が伸びたか」を実感し、自信を深めさせるとともに、一人一人の学力が向上するよう、新たな県学力・学習状況調査を平成27年度からスタートしました。

「個人結果票」は、児童生徒一人一人の調査結果を、子供たちや保護者、先生方にお知らせするものです。

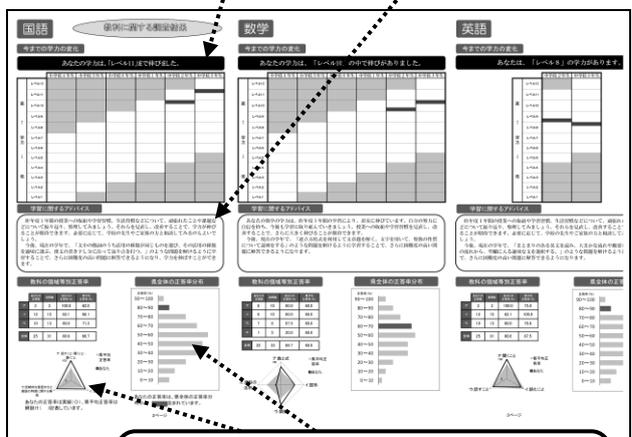
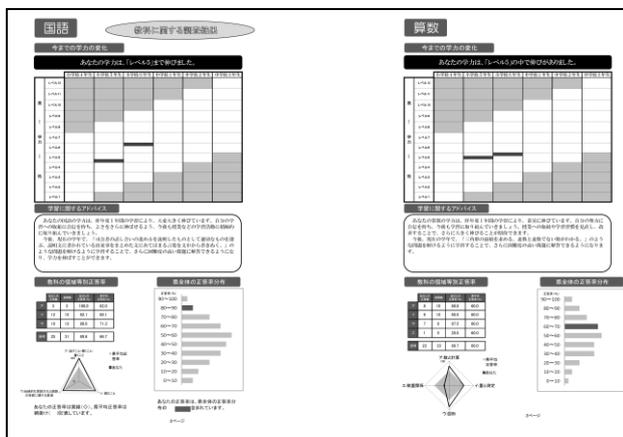
特に、今年度は、2回目の調査が終了したことで、初めて、「学力の伸び」を把握することができました。そこで、「学力の伸び」を調査結果として分かりやすく示すため、新たな概念として「学力のレベル」を定めています。

個人結果票



【小学校及び中学校1年生用】国語、算数・数学

【中学校用】国語、数学、英語



(5) 教科の領域等別正答率
県全体の正答率分布

(1) 学力のレベルについて

学力のレベルはバーの位置で表しています。学力のレベル標記は、1～12段階ありますが、測定は各学年7レベルの間で行います。前学年でのバーの位置と、今回のバーの位置を比べると、学力の変化が分かります。1つのレベルは、それぞれ3層に分かれていて、同じレベルの中でのスモールステップの伸びを表します。個々の学力の変化の見取りに活用してください。

(2) それぞれの学力のレベルで正解できる問題の例

学力のレベルに応じて、出題された問題の概要を示しています。

該当の学力レベルで「正解できる」とは、約70%の確率で正解できることを示しています。個々の児童生徒が正答できる問題の目安としてください。

(3) 学力の変化について

「学力の伸び」が見られた場合、子供たち一人一人の1年間のがんばりを認めたり、褒めたりすることで、子供たちが自分をさらに伸ばし、自分のよさを活かしていけるような言葉かけをしてください。

学力の位置が前年度と同じ、または前年度より下がった場合は「授業への取組」「学習習慣」でのつまずきや、「家庭や友人関係」「生活習慣」などに悩みを抱えている可能性があります。個々の学習方法や生活上の悩みの聞き取り、教育相談などを行うことで、子供の状況を把握し、助言し、その後の取組等を見届けるなど十分な支援を行ってください。

(4) 学習に関するアドバイス

アドバイスは2段構成になっています。上段では、児童生徒の学力の状況について説明し、下段では、さらに学力を伸ばすためには、現在の学年でどのような学習に力を入れることが効果的であるかを記載しています。子供たちの現状や要望に応じて面談などを行い、つまずきや課題を共有しつつ、よいところを認め、子供たちが自分をさらに伸ばし、自分のよさを活かしていけるよう働きかけてください。

(5) 教科の領域別正答率及び県全体の正答率分布

「教科の領域等別正答率」には、領域ごとの正答数、問題数、正答率を県全体の平均も併せて記載しています。「県全体の正答率分布」は、県全体におけるおおよその位置が分かるようになっています。ただし、本調査の目的は、児童生徒一人一人の「学力の伸び」や変化を把握してよさを伸ばしていくことにありますので、県全体の中での位置に重きを置いた働きかけや指導は控え、あくまで参考として御活用ください。

(6) 「質問紙調査の結果～規律ある態度の達成目標～」

規律ある態度の達成目標について、児童生徒の回答状況を示しています。

(7) 自由記述欄

夏季休業中の学習計画や取組などについて児童生徒が記入し、担任が確認して返却する、保護者ががんばりを認めるコメントを記入してもらい、担任がコメントを記載しておく等に活用できます。

※ 個人結果票の返却について

児童生徒の調査結果を予め御覧いただき、児童生徒一人一人について、がんばりを認めること、褒めることを中心に結果の見取りを行い、一人一人の児童生徒のよさや課題を伝えてください。

4 調査に関するQ&A

(1) 調査について

【Q1】

従来の調査と県学力・学習状況調査はどう違うのですか。

【A1】

従来の調査は、学力を正答率で表すことが多く、正答率は、調査年度の子供の学力の現状を把握することには適していますが、実施年度が異なる調査の結果を比較しにくいという課題があります。

そこで、県学力・学習状況調査では、問題の難易度を考慮に入れて学力を測定する、つまり、「どれくらい難しい問題に正答できたか」という視点を加え、小学校4年生から、中学3年生まで、子供たちの学力が伸びていく様子をより明確に示すことができるようになっています。

【Q2】

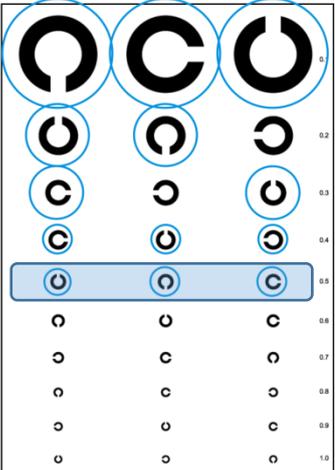
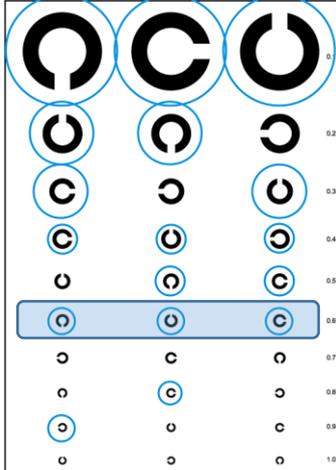
学力のレベルとは何ですか。また、どのように測定していますか。

【A2】

本調査では、学力のレベルを「難しい問題を解く力」とし、レベルが上がるほど難しい問題を解く力があると捉えています。問題には、それぞれ難易度を設定しており、問題への解答状況で学力を測定しています。

例えば、小学校3年生の学習内容で、 $12 \times 6 = 72$ という「整数のかけ算」の問題より、小学校4年生の学習内容で、 $0.5 + 21.5 \times 6 = 129.5$ の「小数のかけ算とたし算が混ざった問題」の方が難易度の高くなっています。このような難易度の問題に安定して正答すると、学力レベルも上がることになります。

健康診断での「視力検査」をイメージしてください。

Aさん				Bさん			
			0. 1				
			0. 2				
			0. 3				
			0. 4				
			0. 5				
			0. 6				
			0. 7				
			0. 8				
			0. 9				
			1. 0				

○ … 見えたもの

視力検査では、「どれくらいのサイズの文字や記号が安定して識別できるか」を測ります。
例えば、Aさんの場合は、視力 0.5 の記号までが安定して見えているので、0.5 と判定されます。

一方、Bさんは、0.8 や 0.9 の記号も見えているようですが、安定して見えているのは 0.6 の記号までですので、視力は 0.6 と判定されます。

この「文字や記号のサイズ」が「問題の難易度」に相当します。

本調査では、小学校 4 年生から中学校 3 年生までのすべての問題に難易度を決めて、子供たちの正答状況から「学力のレベル」を測定しています。

(2) 個人結果票の見方について

【Q3】

同じ正答率の場合、同じ学力レベルになるのですか。

【A3】

同じ学力レベルにならない場合もあります。

県学力・学習状況調査の問題は、正答率が高いか低いかではなく、難しい問題に正答できるほど、高いレベルとなります。

例えば、同じ 10 問を A と B の子供が解答した場合に、A は一番簡単な問題を 1 問間違えて、残りは全て正答し、B は一番難しい問題を 1 問間違えたとします。この場合、正答率で考えると、A と B の学力はいずれも 90% で同じということになりますが、本調査においては、より難しい問題に正答できている A の学力レベルの方が高くなります。

【Q4】

学力レベル 7 で考えた場合、小学校 4 年生の学力レベル 7 の児童と、中学 1 年生の学力レベル 7 の生徒の学力は、同じと考えてよいのでしょうか。

【A4】

県学力・学習状況調査の「学力のレベル」については、学力レベルが上がるほど難しい問題を解く力があると考えています。小学校 4 年生のレベル 7 と中学校 1 年生のレベル 7 では、正答できる問題の難易度は同じです。

ただし、小学校 4 年生の学力レベル 7 の児童が中 1 のレベル 7 の問題を解けるかということ、解けない可能性が高いです。これは、学習指導要領により学習内容が定められているため、中学校 1 年生のレベル 7 の問題を小 4 の児童はまだ習っていないためです。

【Q5】

小学4年生の学力レベル5だった児童が、小学校5年生でも去年と同じ学力レベル5の場合は、学力は伸びていないのですか。

【A5】

本調査ではこの場合、新しいことを学び成長していますが、昨年度より難しい内容の問題を解く力は、まだ不足していると捉えています。

例えば、ある児童が4年生のときに、 $12 \times 6 = 72$ という「整数のかけ算」の問題を正答し、5年生の調査では、 $91 \div 7 = 13$ という「整数のわり算」の問題を正答できたとします。この児童は「わり算」のやり方を学んだことにより、 $12 \times 6 = 72$ と同じくらいの難易度の問題に正答できたということになり、新しいことを学ぶことで成長しています。

しかし、さらに難易度の高い設定の $0.5 + 21.5 \times 6 = 129.5$ という「小数のかけ算とたし算が混ざった」問題に、安定して正答することができなければ、レベルを上げるまでの学力が不足していることとなります。

【Q6】

児童生徒の学力の変化について、どんなコメントをしていますか。

【A6】

コメントは、次の①～⑦のパターンがあります。

	児童生徒の学力の変化の状況	表示されるコメント
①	・学力が伸びて、レベルが上がった場合	あなたの学力は、「レベル〇」まで伸びました。
②	・同じレベル内で、伸びがあった場合	あなたの学力は、「レベル〇」の中で伸びがありました。
③	・学力の位置が前年度と同じだった場合 ・学力の位置が前年度より下がった場合 (レベルが1つ下がった場合を含む)	あなたは、「レベル〇」の学力があります。 (〇は H28 の児童生徒の学力レベルの数字)
④	・2つ以上レベルが下がった場合 ・正答数が0問であった場合(学力のレベルの ■ は表示されません。)	学校の先生等と、学習などについて相談をしてみましょう。
⑤	・全ての調査問題に正答した場合	あなたの学力は、レベル〇以上になりました。 (〇は当該学年での最高レベルの数字)
⑥	・本年度の調査を未実施の場合 (昨年度実施・未実施の場合とも)	本年度の調査を受けていないため、今回の学力のレベルは表示できません。
⑦	・本年度の調査は実施したが、昨年度の調査を未実施の場合	あなたは、「レベル〇」の学力があります。 (〇は平成28年度の児童生徒の学力レベルの数字)

【Q7】

正答数が0問だった場合は、レベルの表記はどうなりますか。また、全問正答した場合はどうなりますか。

【A7】

正答数が0問の場合は、「学力のレベル」は表示されません。どのレベルに達しているか、測定できないためです。

また、全問正答した場合は、該当学年で測定できる問題の範囲の一番高いレベルの数字で、「あなたの学力はレベル〇以上になりました。」と表記されます。

【Q8】

学年の中で、レベルの数値が1上がると、該当学年内でのレベル数値は低くても「大きな伸びが見られた」とコメントされていますが、なぜですか。

【A8】

本調査では、どの学力レベルの中でも、数値が伸びているのであれば、子供一人一人に伸びを実感させ、自信を持たせることが重要と考えています。

そのため、昨年度の自分と比較して1レベル難易度の高い問題を解けるようになったことを「大きな伸び」と捉えてコメントしています。

【Q9】

中学2年生での学力レベルが5（中学2年生の中では一番低い学力レベル）の場合、学力レベル5より下の学力レベルにはつけられない状態になっています。この場合の学力レベルは、どのような基準でつけているのですか。

【A9】

中学2年生の調査における学力の測定できる問題の範囲はレベル5からレベル11と設定しています。レベル5の問題に1問でも正答していれば、レベル5の学力がある可能性があるため、レベル5に位置付けられるようになっています。この場合、レベル5を明らかに下回るのは、正答数が0問の場合であり、その場合は、レベル自体も表示されないこととしています。

【Q12】

個人結果票を児童生徒に返却する際、どんなことを伝えればよいですか。

【A12】

本調査は、過去の自分の学力と現在の学力を比較できる設計となっています。

学力の変化の状況により、教員が保護者や一人一人の子供に適切な働きかけを行うことにより、今後の学力向上につなげていただきたいと考えています。学力が伸びた子供に対しては、1年間の頑張りを認めたり、褒めたりすることで、自信を持たせてください。また、学力が伸びていない子供に対しては、教員と教育相談などを行うことで、つまずきや悩み等を共有し、子供の取組について丁寧な見取りなどを行うことで、今後の学力向上につなげてください。

子供の解答状況については、「教科の領域別正答率」の数値やレーダーチャートを参考にしてください。具体的問題については、本調査の設計上非公表となっていますが、県ホームページ上に「問題概要」や「復習シート」（類似問題）を掲載しているので、それらも活用してください。

（4）結果帳票について**【Q13】**

帳票「教科に関する調査」にある学校の学力レベルは、どのように決められているのですか。

【A13】

在籍する子供たちの学力の平均値で決定しています。その平均値を学力のレベル（12のレベルを3分割に細分化した数値、1-C～12-A）に当てはめています。市町村の学力レベルも同様に決定しています。

【Q14】

帳票の「26_学力の伸びの状況」の見方についてです。線の傾きは何を表していますか。

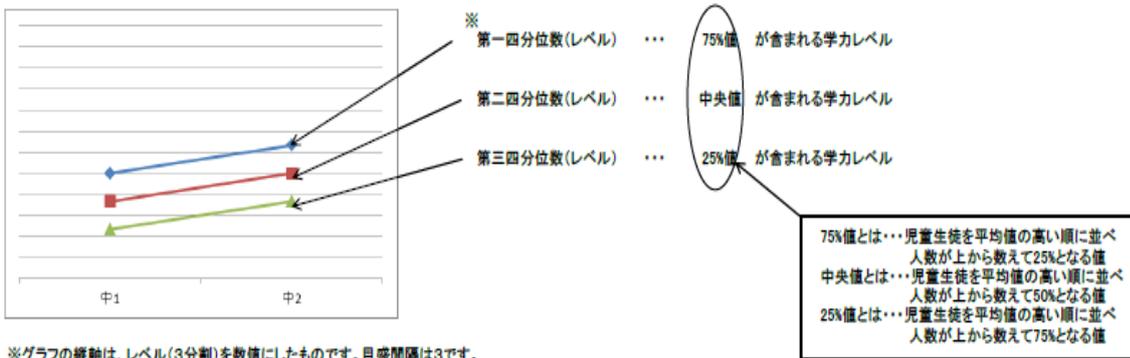
【A14】

この帳票では、同じ学齢の集団の中で、特定の位置にいる児童生徒（75%値に位置する児童生徒、中央値に位置する児童生徒、25%値に位置する児童生徒）の前年度と今年度の学力を示しています。

前年度のそれぞれの位置を、今年度と比べることによって、この集団の学力分布の変化が分かります。

「26_学力の伸びの状況」の見方

この帳票では、H27中1とH28中2 のような同集団を比較しています。当該学年の学力の変化を表すものです。



線の傾きのパターンによって、それぞれの層に分布する児童生徒の状況が分かるので、前年度の指導効果を考える参考にしてください。

(例)

どの分位数も右上がり	傾きにばらつき①	傾きにばらつき②
<p>上位層、中位層、下位層、どの層の児童生徒も学力を伸ばしている。</p>	<p>上位層に伸びは見られないが、中位層、下位層の児童生徒の学力は伸びている。</p>	<p>上位層は伸びているが、中位層にほとんど変化はなく、下位層の学力は下がっている。</p>

第2章

教科に関する調査結果の概要

ねらい

昨年度と本年度の「教科に関する調査」の結果から、県全体の「学力の伸び」の状況や、学年ごとのレベルの分布を掲載しました。

また、それらについての分析や、今後の対応策等についても、併せて記載しています。

活用方法

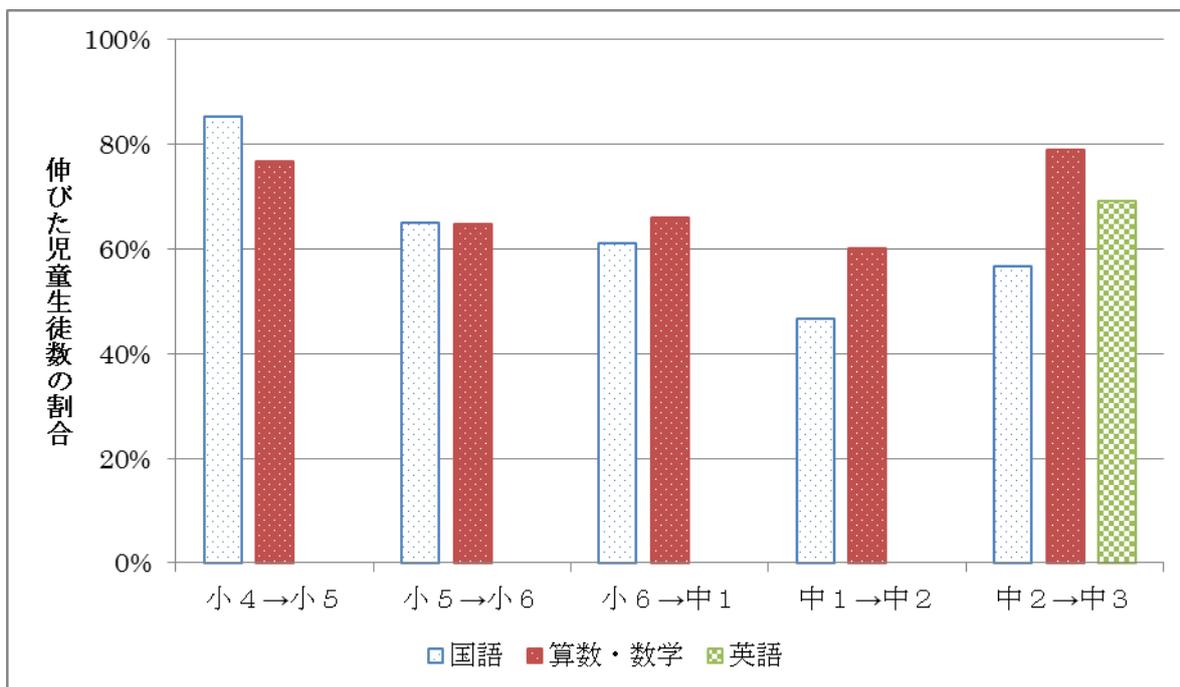
校内研修の資料や、調査結果を分析する際の参考として御活用いただけます。

1 「学力の伸び」の状況

○ 県全体の状況

- 小学校4年生から5年生では、国語、算数とも、多くの児童の学力が伸びている。
 - 小学校5年生からは、学年が上がるごとに学力が伸びた児童生徒数の割合がやや減少していく。
 - 特に、中学校1年生から2年生で、伸びた生徒数の割合が最も少なくなっている。
 - 中学校2年生から中学校3年生では、学力が伸びた生徒数の割合が上昇に転じている。
- ⇒ いわゆる「中1ギャップ」などの影響があると考えられる。

教科ごとの「学力の伸び」が見られた児童生徒数の割合



教科	小4→小5	小5→小6	小6→中1	中1→中2	中2→中3
国語	85.4%	65.1%	61.2%	46.6%	56.6%
算数・数学	76.8%	64.9%	66.1%	60.2%	79.0%
英語	—	—	—	—	69.1%

※ 上記のグラフ及びデータは、昨年度から「学力の伸び」が見られた児童生徒数の受検者数全体に対する割合である。教科ごとの「学力の伸び」が見られた（各学校に送付した帳票「教科に関する調査 採点結果」にある「学力の伸び」の値が1以上であった）児童生徒数を、受検者数で割った値であり、いわゆる「伸び率」（全ての児童または生徒の「学力の伸び」の値を足し合わせて、受検者数で割った値）ではないことに注意されたい。

○ 分析と対応策

- 本年度の調査結果では、学力が着実に伸びた学年と、伸びなかった学年が見られた。
- 小学校中学年から高学年にかけても、学力が伸びた割合は低下傾向にあるが、中学校1年生から2年生で割合が最も小さくなることについては、中学校入学後に学習内容が複雑化したり、抽象化したりする傾向があることが理由として考えられる。
- 今後の対応策として、小中連携をより一層推進していくことが考えられる。例えば、同じ校区内の小・中学校で合同研修会や授業研究会を実施し、相互に授業を見合って指導法の違いについて共通理解を行った上で授業改善を図る、お互いの学習内容について情報共有し、その違いを理解した上で児童生徒への指導改善を行うなどである。

2 小学校4年生から中学校3年生までの各教科の学力レベルの分布

(1) 国語

	小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生	中学校3年生
レベル12						2%
レベル11					2%	5%
レベル10				7%	7%	14%
レベル9			9%	11%	19%	27%
レベル8		24%	29%	32%	33%	27%
レベル7	35%	26%	26%	28%	26%	15%
レベル6	18%	25%	24%	16%	10%	10%
レベル5	22%	14%	12%	6%	3%	
レベル4	13%	8%	1%未満	1%未満		
レベル3	12%	3%	1%未満			
レベル2	1%未満	1%未満				
レベル1	1%未満					

※ 数値は、学年ごとに各レベルに属する児童生徒の人数を全受検者数で割った値

○ 分析と対応策

- ・ 小学校では、下位層（下位1レベル分）の児童は学年が上がるごとに減っている。
- ・ 小学校6年生では、上位層（上位2レベル分）が大きく減り、下位層（下位1レベル分）に該当する児童は、ほとんどいなくなる。
- ・ 中学校では、学年が進行するに従って、上位層（上位2レベル分）は減り、下位層（下位2レベル分）の割合が増えている。
- 小学校では、下位層への手立てには効果が表れているが、上位層を伸ばす工夫が必要と考えられる。
- 中学校では、下位層（下位2レベル分）と上位層（上位2レベル分）への指導の工夫が必要である。
- 中学校第1学年から第2学年では、下位層が増え、上位層が減っている。小学校と中学校で教科の課題等を共有し、連携を図る必要がある。

(2) 算数・数学

	小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生	中学校3年生
レベル12						7%
レベル11					4%	5%
レベル10				9%	8%	14%
レベル9			12%	11%	14%	18%
レベル8		14%	11%	18%	21%	18%
レベル7	19%	22%	24%	22%	21%	18%
レベル6	22%	25%	20%	18%	16%	20%
レベル5	24%	20%	18%	12%	18%	
レベル4	16%	11%	9%	10%		
レベル3	10%	5%	6%			
レベル2	5%	2%				
レベル1	3%					

※ 数値は、学年ごとに各レベルに属する児童生徒の人数を全受検者数で割った値

○ 分析と対応策

- ・ 学年が上がるにつれて、各学年の分布の山が少しずつ下になっている。
- ・ 小学校4年生から中学校2年生では、学年が上がるにつれて、最も高いレベルの児童生徒の割合は減っているが、中学校3年生では、最も高いレベルの生徒の割合は増えている。
- ・ 学年が上がるにつれて、最も低いレベルの児童生徒の割合は増えている。
- 小学校では、特に、中位層を伸ばし、上位層を増やすための指導の工夫が必要である。中学校では、特に、低位層を伸ばし、中位層を増やすための指導の工夫が必要である。
- 学力レベルの低い児童生徒に対して、授業において、算数的活動、数学的活動の充実を図り、生活との関連を重視することが重要である。学力レベルの高い児童生徒に対して、学習したことを活用して考えたり判断したり表現したりしようとする態度を育てることで、より一層学力が伸びると考えられる。
- 指導内容の系統や関連を踏まえ、児童生徒の実態に即した適切な指導と評価の計画を作成、活用し、児童生徒一人一人を確実に伸ばすことが大切である。

(3) 英語

	中学校 2 年生	中学校 3 年生
レベル 12		11%
レベル 11	12%	13%
レベル 10	11%	14%
レベル 9	20%	21%
レベル 8	20%	19%
レベル 7	20%	14%
レベル 6	13%	9%
レベル 5	5%	

※ 数値は、学年ごとに各レベルに属する児童生徒の人数を全受検者数で割った値

○ 分析と対応策

- ・ 全体としては、学力のレベルが正規分布に近い。
- ・ 学力レベルの分布から、ほとんどの生徒が着実に学力を身に付けているようである。本県においては、多くの英語科教員が授業を英語で行っていることなどが理由として考えられる。

【参考】授業における、英語担当教員の英語の使用状況

	本 県	全国平均
中学校第 1 学年	75.7%	58.3%
中学校第 2 学年	74.7%	56.9%
中学校第 3 学年	71.4%	54.8%

「発話をおおむね英語で行っている」と
「発話の半分以上を英語で行っている」
を合わせた教員の割合

※ 文部科学省「平成 27 年度英語教育実施状況調査（中学校）」より

- ・ 中学校 2 年生から 3 年生にかけて、それぞれの上位層（上位 2 レベル分）と下位層（下位 2 レベル分）を見ると、いずれも中学校 3 年生の方が多く分布していることが分かる。英語学習に意欲的に取り組み、高い学力を身に付けている生徒が増えている一方、学力が定着していない生徒も増えていると考えられる。
- 学校ごとに生徒の学力レベルを把握し、学力層を意識した指導（特に、学年が上がるごとに下位層の生徒が増加していかないような）を行うことが大切である。
- 今後も、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、生徒の発達段階及び興味・関心に即し、学習内容を繰り返して指導し定着を図ることや、アクティブ・ラーニングや小中連携の視点を踏まえた授業改善等を行うことで、より一層学力が伸びていくと考えられる。

○ 「埼玉県学力・学習状況調査のデータ活用事業」について

埼玉県の学力向上のため、本調査のデータを統計学や教育学に基づき、より詳細に分析することを目的として、外部の研究機関と連携したデータ分析を行っています。

これにより、本調査結果を、指導と学力の視点からより専門的に分析し、例えば、効果的な指導方法などを明らかにしたいと考えています。この調査結果については、平成 28 年度末にお示しする予定です。そちらの結果についても、学力向上や生徒への指導の参考として御活用ください。

